

上野公園で新たな試み

## Museum Start あいうえの

上野公園に集まる9つの文化施設\*が子どもたちのミュージアム・デビューを応援する、それが2013年8月から始まった「Museum Start あいうえの」である。東京文化発信プロジェクトの一環で、東京都美術館（以下、「都美」と）と東京藝術大学（以下、「藝大」）が推進役となって実施し、他の7館が共催する。

このプロジェクトは、子どもや家族でもいろいろなミュージアムを気軽に楽しめるようにさまざまな学びの環境を整えている。

まず、ウェブサイト <http://museum-start.jp> では9つの文化施設のワークショップやイベント情報が見渡せるようにし、また、これらに楽しく参加するために「ミュージアム・スタート・バック」を用意した。18歳以下の子どもとその家族が対象で、オリジナルバッグには、ミュージアム活用に役立つ「ビビハドトカダブック」と東京藝術大学教授でアーティストの日比野克彦オリジナルデザインの缶バッジが入っている。

さらに、このバックを持って各ミュージアムに行き、各館の館種の頭文字からなる合言葉「ビビハドトカダブ！」と唱えると施設ごとに日比野氏がデザインしたオリジナル缶バッジがもらえる。

そして、個人や学校向けのワークショップなどを開催する「あいうえの学校」では、より深いミュージアムでの鑑賞体験ができるのだが、これらのプログラムでは、参加する子どもと大人がともに学ぶことに重きを置いている。それぞれ

のプログラムには、100人以上の大人が所属する「東京都美術館×東京藝術大学とびらプロジェクト」のアート・コミュニケーター（愛称：とびラー）のサポートがあり、とびラーたちは、子どもたちの声に耳を傾け、コミュニケーションを通じた学びを深める。「ミュージアム・スタート・バック」には保護者向けのメッセージが入っているし、障がいのある子どもたちを含むすべての子どもたちを対象にした「のびのびゆったりワークショップ」では、同時に保護者向けプログラムも行われる。学校向けプログラムは授業の事前から事後活動まで学芸員や大学の教員が共に授業サポートに関わり、教師にとっても新たな学びの機会が生まれている。

なお、2年目の今年度は「あいうえの学校」のなかに中高生を対象にした「ティーンズ学芸員」（全10回）や、昨年度の参加者たちが継続して上野公園のミュージアムを楽しんでほしいと、もう一度集まる「ホームカミングデイ」も新たに加わった。

上野公園のミュージアムは「子どもで」、新たな学びをスタートさせている。

※上野の森美術館、国立西洋美術館、東京都美術館、東京国立博物館、恩賜上野動物園、国立国会図書館国際子ども図書館、国立科学博物館、東京藝術大学、東京文化会館



あいうえの学校の「あいうえのものがたり」。26年度の第1回目は、東京国立博物館へ。鑑賞の前にとびラーたちと話し合う



あいうえの学校の「あいうえのものがたり」第2回。とびラーたちと国立西洋美術館で鑑賞する



あいうえの学校の個人向け連続プログラム「放課後のミュージアム」。上野公園をめぐる中で生まれた発想や考えから、何かを創り出す



すべての子どもたちが対象の「のびのびゆったりワークショップ」。とびラーとのコミュニケーションを大切にしている  
＜写真提供：東京都美術館＞

集めて、分けて、記して、見せて…。

絵本『キュッパのはくぶつかん』が教えてくれること



ノルウェーの絵本作家、オーシル・カンスタ・ヨンセン作の『キュッパのはくぶつかん』（ひだにれいこ訳、福音館書店刊）は、

主人公の丸太の男子「キュッパ」が、森でいろいろな物を集めてきて、その集めたいろいろなものを分類し、タグをつけ、みんなに見てもらおうと展示して、博物館を開き、案内に奮闘し、やがて疲れてしまう。しかし、奮起して、今度は、記録し、リサイクルし、最後は、芸術作品まで作ってしまうという、まさに、キュッパを通して、楽しくも辛くも、まためげない博物館活動が展開されている。かわいいキュッパが一生涯懸命に、「はくぶつかん」活動をするのが、なんと愛らしく応援したくなる。絵の良

さも、魅力だ。2010年5月にノルウェーで刊行され、フランス、スウェーデン、ドイツ、韓国でも出版され、日本では2012年4月に刊行された。たちまち人気になり、すでに5刷を超えている。

去る5月5日（月・祝）、東京都美術館の講堂で子どもたちのミュージアム・デビューを応援する「Museum Start あいうえの」の趣旨と重なることから、オーシルさんを招いた講演会が催された。オーシルさんも、葉っぱや小枝などを集めるのが好きという。